

女たちの名詩集

ラ・メールブックス 2

新川和江編

思潮社

片瀬博子

夜は根源的な時間であり全てのものの日常性の仮面がはぎとられ、自らの存在を問うときです。自分というものが何なのか、どのようにして現在へ至っている

征矢泰子

しばらくのあいだ、あけてもくられてもそのテーマのことはかり思いつづけ感じつけて、いわばそのテーマをわたし自身の体内にみごもるという過程が、ど

黒部節子

その家には、その頃、大家族が起き伏していた。その人たちは死んだ後も、そこに住んでいるらしく 保ちゃん 千やん おばあさん 姉さん と呼ばれ、



千田陽子

年老いた犬は何気なくその空をとびこえた。水たまりの空がすすかにゆれた。わたしは、そのときふと、とてもながい時間がゆっくり流れ、消えていったよ

千田陽子

年老いた犬は何気なくその空をとびこえた。水たまりの空がすすかにゆれた。わたしは、そのときふと、とてもながい時間がゆっくり流れ、消えていったよ



こたきこなみ

食意識がこれほど深く人間存在の根底にあるならば、詩で扱ってもよいのではないか。折からピアフラやバングラデッシュの飢餓が報道され、私の子供時代

山下千江

視力も霞んでいた目を何故かパッチリと見開いて、病人は花をみつめ、弱々しく泣いた。言葉を変えなくなって久しい母娘の、それはこの世の名残りの会話で

こたきこなみ

食意識がこれほど深く人間存在の根底にあるならば、詩で扱ってもよいのではないか。折からピアフラやバングラデッシュの飢餓が報道され、私の子供時代飢餓が報道され、私の子供時代

女たちの名

江苏工业学院图书馆
藏书章

新川和江編

ラ・メールブックス 2 思潮社

女たちの名詩集——新川和江編

ラ・メールブックスⅡ

著者＊片瀬博子 征矢泰子 黒部節子 瀧口雅子

千田陽子 こたきこなみ 山下千江 木村信子

三井ふたばこ 岡島弘子 小川アンナ 森沢友日子

梶原しげよ 水出みどり 小出ふみ子 堀内幸枝

発行者＊小田久郎

発行所＊株式会社思潮社

東京都新宿区市谷砂土原町三一十五
電話（二六七）八一四一・八一五三 振替東京八・八二二一

印刷所＊凸版印刷株式会社

製本所＊岩佐製本

発行日＊一九九二年四月一日 新装第一刷

女たちの名詩集

新川和江編

目次

片瀬博子 II

子守唄 抱擁 抱擁 抱擁
マリヤ・マグダレーナに

征矢泰子 27

綱引き 人魚姫に なみだ 白いシクラメン
娘に しるし 六月のかたつむり 種子喪失

黒部節子 作品解説Ⅱ小柳玲子 41

蘭 階段は途中で 鳥そのほか 未完の家
本星崎(V)

瀧口雅子 53

鋼鉄の足 屠殺場で おかしな話
男について 若もの 小さなこと
悲しみの数

千田陽子 65

詩の朗読会 あざみ 明日の天気 少年工

犬も人もあるいていない

こたきこなみ 77

山姥和讃 寒流 火の家
幽霊さん お名前は

山下千江 91

啓蟄（けいちつ） わかれ 綾とり
お団子のうた 浮寝鳥

木村信子 103

あつち 父娘 河原 柿の花が咲く頃 夜
日常 母親 片袖

三井ふたばこ 115

ボエジイ 愛 屋の歌（ある絶望に）
後半球 みち（菰子に） 時 池
純白のシラブル

岡島弘子

127

水の色は何色 水の見た夢 水のある風景
道 風船 夢 水のゆくえ

小川アンナ

139

嵐がやってくるという静かな晩に
によしんらいはい わたしらの愛
ひまわり頌歌 女の家 父と私 葡萄

森沢友日子

151

指のひと仕事 笑う指 理想の指
逃れられない指 ふるえる指 潰す指
疼く指 わからない指 首をささえる十指
木の指 さむい指たち ポール状態

梶原しげよ

165

翹 仔やぎ 波 おもいで
生きものがあゆむのは それを想うとき
祭りのあとに

水出みどり 177

髪についての短章（抄）
舟

小出ふみ子 189

花影抄 職業 魔城の王者
帰去来

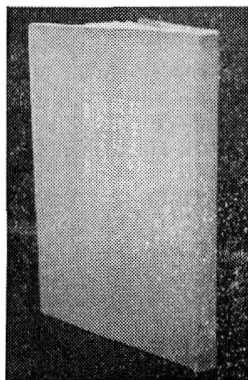
堀内幸枝 199

困炉裏 春の雲 田園道 蕎麦の花 葡萄棚
曇り日 タぐれ 不意の騒

あとがき 新川和江 210

女たちの名詩集

片瀬博子詩集



目次 I / 月夜 誕生 祝福 Intruder
 ー子の誕生日に ノクターン 夕映え 孤
 児 子守唄 木の葉 II / 婚姻 抱擁 抱
 擁 抱擁 悲歌 Love Affairs 鉄の環
 もっと小さな隠れ家を 覚醒まで ペラフ
 オンテール わたしの試練をうたえる 旅
 人 あとがき

片瀬博子詩集『おまえの破れは海のように』 「抱擁」と題した詩がこの詩集には三篇収められているが、わけても最初の一篇を、現代女流詩の傑作のひとつと私は今も考えている。男女の性の本質的ちがいとその行為を、これほど高雅に、映像的かつ感覚的に表現し得た作品がほかにあるだろうか。

片瀬さんの詩には、暗喩法を用いて表現した作品が多く、またカトリシズムの影が深く射し込んでいるために、軽みに欠ける憾みもあるいはあるかもしれない。しかし、抱え持ったみずからの性に、内なる神と悪魔に、鞏固な城に挑むかのような挑み方をしている詩人は、そう幾人もいるものではない。詩集の題名を、旧約聖書エレミヤ哀歌の中の一節へ女よ おまえの破れは海のように大きいからとっているのを見ても、それは肯けよう。ほかに詩集『この眠りの果実を』、訳詩集に『キャスリン・レイン撰詩集』『テド・ヒューズ詩集』がある。

(四六判/上製カバー装/96頁 昭37・9 思潮社刊)

子守唄

巨きな夜の乳房が

屋根の下をのぞく

横たわっている小さなものよ

光から闇へ お前が恍惚とゆすぶる

ブランコの振幅が小さくなってゆく

一日 お前をかこんだ古い家具も

いたんだ壁もミルクもじゃが芋の湯気も

ぬいものをした女も

闇の中に姿を消してゆく

そして顔も名前もさだかでないものが

お前のまわりに むらがってくる

お前だけが確かめてくれるとでもいうように

己れが何であるか――

ごらん

「子守唄」 わたしは子供が生れてから詩を書きはじめました。それまではノイローゼといっている程、自分の観念の世界に閉じこもっていました。子供の出生を通してその生々しい絆で世界に結びついたのです。

子供が生れてはじめて畏怖感のうちに命にめざめ死にめざめたのです。子供は命にあふれた他者でした。それだけ死にとりまかれていた存在でした。

わたしは極めて本能的な人間なのでしょう。わたしの母性本能はそれほど子供と結びついてしまっていて、子供の死という予感の中ではじめて死の恐ろしさが骨身に浸透したのです。死は観念ではなくて具体的なものとなりました。へ遠かったものが急に近付いてきて／わたしの血の中に忍びこんだ／新しい所有は新しい可能性をめざませた／喪失を……／お前がほんとうに命なら／それだけお前は死なのだ」詩集『お前の破れは海のように』の「誕生」から。〈畏るべき歡喜よ……／日は呪いに輝やく〉詩集『この眠りの果実

お前の両側に

男といわれるもの

女といわれるものが ひきよせられてくる

眠っているお前の上で

別々の世界の星に照らされた

寂しい二つの顔が出会う

あなたは誰？ 何故ここへきたの

分らない 何も分らない 俺の疲れた脚――

だが ここ以外に行き着く場所はない

小さなものよ

お前だけが 距離と意味を与えるのか

……いつから そしていつまで

わたしたちはこうしてここに

とり残されているのだろう

海の退いた後のように

を」の「生誕」から。

この詩「子守唄」もいわばこうした
悲哀の土壌から生れたものでした。

夜は根源的な時間であり全てのものの
日常性の仮面がはぎとられ、自らの存
在を問うときです。自分というものが
何なのか、どのようにして現在へ至っ
ているのか、何処へゆくのか、何も分
らない。そうしたあいまいさの中にふ
いうちに入ってきた嬰兒という至純な
存在。それだけが純粹の唯一の名前で
あります。

その新しい存在は父と母の異様な遠
さを照らしだし、しかも決定的にひき
よせるのです。この詩の鍵になる言葉
は「二人の人間が／お前の両側で／一
つになった夜空と／一つになった土の
哀しみを／嘔吐しているこの静かな間
……」であります。

夜の穴ぐらにお前を挟んで横たわる

うごかない二人の人間

空にむかってひらいた墓の底で仰臥する

死者たちの終りの姿で

お眠り 子供よ

二人の人間が

お前の両側で

一つになった夜空と

一つになった土の哀しみを

嘔吐しているこの静かな間……

抱擁

かたくしまっている肉を おしひらいて

夜明けは あふれ入ってきた

「抱擁」 わたしは人間の本能に最大の関心を持っています。知性は血の中の声を黙らせることはできません。何という大きな情熱が血の中にひそんでいることでしょう。幼子から老人に至るまで、人の行為の動機を探ってゆく